



Vision

プロジェクト研究の功罪

理化学研究所 脳科学総合研究センター 発生発達研究グループディレクター

御子柴 克彦

最近、国の予算のなかで、プロジェクト研究の占める割合がかなり大きくなってきている。これらの大部分はトップダウン方式により、あらかじめテーマが決まった形で、公募してプロジェクトに多額の研究費などをつけて、研究成果を求めるものである。

ここで問題になるのは、そもそもプロジェクトはどのようにして、決められたかということである。社会からの要請により、思いもかけず必要になったり、様々な研究の中から、新しい発見がなされ、其れに基づいて緊急に成果を求めるために、プロジェクトを動かすなど、様々なものがある。この緊急な要請によるものは早急に成果を得ることを加速する意味で、ある意味、成果がうまく出てくれば大変好ましいものである。しかし、急な、要請に基づく場合、筆者がよく目にするのは、日本全体の研究体制と人材が十分になく、且つ研究の戦略を含むノウハウが十分でないのに、膨大な研究費のみが投入されて研究基盤の育成に考慮が払われていない場合がある。応募の申請書類をみても、ほとんど似たような内容になっている。

しかも3~4年後には、レビューと称して、成果発表を要求されている。予想された、あるいは、予想通りの結果が、出てくることが多い。しかも3~4年で終了するというものもあるので、たとえ其のプロジェクトで得た研究のノウハウなどが利用されることなく、別のプロジェクトへと、研究者が研究費を確保するため動き回る例も出てい

る。プロジェクト研究の悪い面は、目標があらかじめ決められているため、予定した目標の結果しか出てこないことがほとんどである。

筆者は、プロジェクト研究は、国家の利益の為に幾つかは必要であることは認めるが、最近は、かなりのお金がこれにまわっていて、本当の意味での自由な研究の枠が少なくなっていることである。新しい現象の発見は予想もしないところからでてくることは、衆知の事実である。「目標が決まったところからは、新しいものは出てこない」。文部科学省からの科学研究費はばらまきといわれて、一時批判を受けたことがあるが、実は、その批判は誤りで、これが、日本の裾野を広げて、若手研究者の育成に大変貢献したことを忘れてはならない。

特に指摘したいのは、プロジェクトが動くときは、どこの部局、例えば文部科学省、厚生労働省、通商産業省、科学技術振興機構いずれも、同じテーマのプロジェクトがとりあげられ、同じような選考委員が、同じような申請者の審査をしていることが多い。どうか、相互の情報の連携を密にして、テーマの重複をさげるとか、研究費の部局による重みづけをするようにして欲しいと思う。

プロジェクト研究をファッションなものととして、現在、生理学という時代遅れの学問の様に取り扱われ、ある大学の医学部では生理学の研究は今更必要なく、研究に携わっていた教官を教育要員にまわし始めているところも有る。大学の

上層部も国のいわゆるプロジェクト研究に合わせて国からの補助を少しでも多くしようとするあらわれであろうが、これは、真の意味のサイエンスを根底から崩すものである。大学の首脳部は真の学問を培うことは、何かをあらためて問い直す必要があり、云うことは、はっきりと言うようにしないと、日本のサイエンスは、政治家の、あるいは、官僚の云うことを鵜呑みにして流されてしま

う。

いまや、ゲノムプロジェクトが終了した現在、システムバイオロジーなどと新しい名前をつけて個体レベルの解析をしているが、これは正に生理学そのものである。生理学はいまや全ての学問の中心であることは、疑いない。我々は、周囲に惑わされないように、研究者として自分自身をしっかり見つめておかなければならない。